

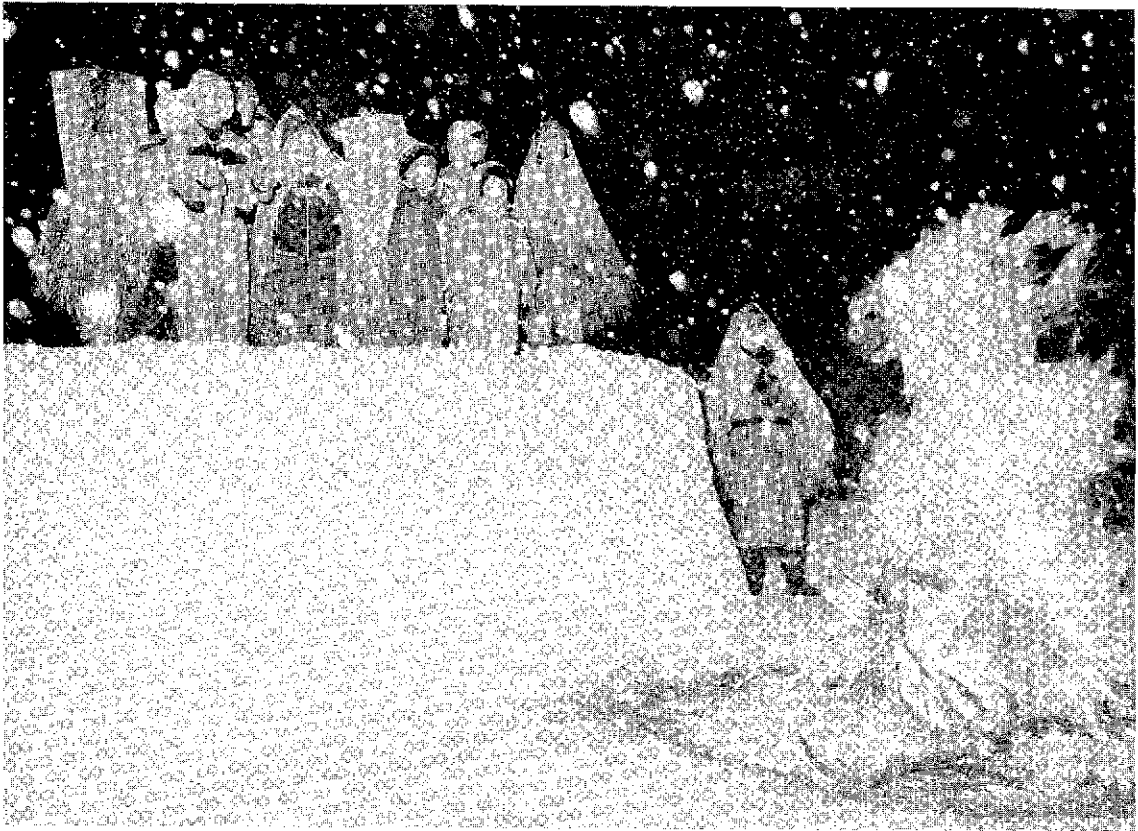
新潟県

平成3年

公民館月報

2月
第456号

記念講演 公民館職員に期待するー2



十日町地方の

鳥追い歌

「おらがうちの
早生田はやせだの稲を
何鳥なんとりがまくらった
雀鳥すずめがまくらった
すずめ

すわどり

立ちあがれホーイホーイ
ホンヤラク
ホーイホーイ

ホンヤラク

小正月十四日の夜から
十五日未明にかけて行わ
れる鳥追い行事。

十日町市赤倉集落で

は、雪を高く積んで塔を
作り、その上で鳥追いを
する。

関ブロ公研修会準備委員会

第二回小委員会開催

主題・分科会の原案まとまる

新年早々の一月十八日(金)第33回関ブロ公研集会のための準備委員会第二回小委員会が開催された。

新潟市中央公民館会議室を会場に、午前十時半から延々五時



間にわたる精力的な会議が続けられた。

内容は、関ブロ公研集会の要ともいべき、大会主題・分科会の骨ぐみ、研究課題の設定等に関する原案の策定にあった。

ここに策定された原案は、二月に開催予定の関東甲信越静公民館連絡協議会理事会で審議され決定をみることになる。

小委員会の委員は次の諸氏で

全国公民館連合会主催

公民館全国セミナー終わる

去る一月二二日(火)から二四日(木)に至る二泊三日にわたり、全公連主催の第二回公民館全国セミナーが、東京都代々木のオリンピック青少年センターで開催された。

今年はず年度に続いて二回目のもので、講義よりは、参加者の持ち寄った課題を中心に研究討議する方式を中心においたのが特色である。

参加者は、各都道府県から一

ある。(五十音順敬称略)

猪股 茂俊 (栃尾市公民館)

大平 剛 (長岡市中央)

小川 昇 (新潟市中地区)

高野 昭彦 (新潟市中央)

小林 敬子 (新潟市坂井輪)

小林 宏行 (十日町市公民館)

小林 弘 (中越教育事務所社会教育課)

関 吉彦 (県社会教育課)

名という精鋭三四名。経験豊富な公民館長、主事の集りで、公民館の抱える問題や課題の解決に苦勞しているエキスパートばかり。四分散会に分かれての研究討議ではどこもが、のっけから本音の出しあい、セミナーの名にふさわしい密度の濃い研究討議がなされていた。

なお、本県からは三条市中央公民館の渡辺健氏が参加した。

公民館全国セミナーに参加して

三条市中央公民館主事 渡辺 健

一月二二日、二四日に開催された「公民館全国セミナー」に参加させていただき、大変貴重な経験をすることができました。

このセミナーは、全国の都道府県から一名ずつ参加し、「生涯学習社会と公民館の役割」の主題のもとに、グループ討議形式で進められるものでした。討議形式の研究会は、ややもすると情報交換のみで終わるきらいがありますが、このセミナーでは、公民館が抱えている諸問題について、その根本を探る本質的な討議がなされました。

私の所属した班は、館長職がほとんどでしたので、広い視野



にたった公民館経営のあり方についての討議でした。

共通の問題点として①公民館の存在価値、②公民館事業のあり方、③公民館職員専門性、資質の向上という三つの協議題にまとめて討議がなされました。

この三つの問題は相互に密接な関係があるので一括しますと、個人個人の学習要求の満足で終わっているカルチャーセンターと違い、公民館は、更にそこから一步高めるための手段を講じていくことが望まれる。そして、その手段を講じるのは、他でもない公民館職員である。

「公民館職員白から感動しない、住民に感動を与えることはできない」「公民館を活かすも殺すも人(公民館職員)なんだ」ということでした。

私は、この三日間セミナーに参加して、全国各地の参加者は、生活や環境等の違いにより、各々抱えている課題は様々なのだろうが、しかし、突き詰めて考えていくと、その根底にある課題はみな同じだという気がしました。公民館職員として、自らを高める努力をしなければならぬと、認識を新たにいたしました。

平成三年度公民館補助予算

四五億三六〇〇万円と決定

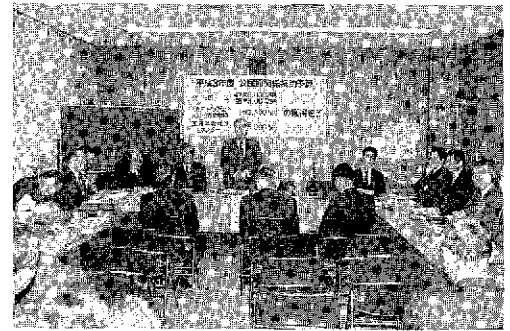
かねて文部省予算として要求されていた公民館建設費補助について、全公連では精力的な陳情活動を展開してきたところであるが、昨年末の第二次内示で、

要求額 四七億八八〇〇万円
(一、五二館分)

決定額 四五億三六〇〇万円
(一、四四館分)
と決定した。これは、本年度の

国庫補助額と全く同額(同館数)である。なお関連施設を含めた詳細は次のとおりである。

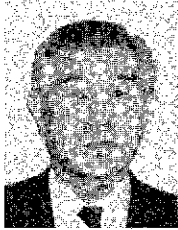
要 求		決 定	
公民館	三三億七億八〇〇万円	公民館	二四億四億三〇〇万円
大規模公民館	一億三億三〇〇万円	大規模公民館	二億一億三〇〇万円
生涯学習推進センター	三億三億三〇〇万円	生涯学習推進センター	二億一億三〇〇万円



辛 口

私の地域(旧村)は、人口四百二十一人で、昭和三十年代に比べ世帯数は、帯数は、人口は、

過疎化による問題は多様で深刻である。私は住民のひとりとして五年前、十四人の仲間



と危機感をもって地域の再生を目指して取り組みはじめた。まだ道半ばであるが、何か確かなものを感じるこのころである。それは、①地域の見直しから新たな価値を村民の発想・構想が村行政で取り上げら

地域づくりにも積極的

内山 克行

見出し、②住民に共通の目標ができ、③新しい地域づくりに積極的に参加する人が増大したことである。私どもの目指す「ふる里再生」は、教育・

学習の地として価値をおき、主として首都圏の児童生徒の体験学習・交流の里づくりであり、地域の資源と人

地域づくりは、住民の発想・構想が

れ、三年前から国県補助事業でふる里体験・交流施設づくりが進められている。今、急がなければならないことは、利用者の求めに応じられる多様なプログ

(大島村教育長)

北方四島に公民館の灯を

近藤 和義

二月七日は北方領土の日。この日に前後して、パネル展を実施するなど北方領土に思いを寄せる事業はしきりである。昨夏は、多数の墓参団が出かけ涙を新たにしている。一日も早くこれらの島々に、公民館の灯が明々ともることを願う。

公民館歳時記

戦後、未解決であった領土問題のうち、奄美群島・小笠原諸島・そして沖縄が祖国に復帰しましたが、北方領土すなわち歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は四十年を経過した現在なお、ソ連の占領下に有ります。終戦当時、これらの四島には一万七千三百余人の島民が住んでいましたが領土問題が未解決のため、生まれ故郷に帰ることもできず、そればかりか度重なる捕虜事件によって沿岸漁民の暮らしも脅かされています。

北方領土は千葉県とほぼ同じ面積の、美しい自然と豊かな資源に恵まれた島々であり、江戸時代から私たちの祖父が開拓し一度も外国の支配を受けたことのない



国民一人ひとりの意志を北方領土返還実現に反映させるため、私たちの運動に対するご支援をお願いします。(北方領土返還要求運動 新潟県民会議会長)

期待する —その2—

吉川 弘

民館連合会主催の「都市公民館
されたもので、当時新潟大学教
(録音再生一要旨一のため。
り)



出てまいりました。いわゆるコン
ピューターのソフトウエア
を用いた学習がどんどん進みま
す。更にコンピュータに詳し
い人は自らソフトを開発して、
コンピュータによる学習を深
めることが可能になってきてい
ます。例えば、キャブテンシ
ス(商品名なのでよろしくな
いかもありませんが)で様々な
学習が可能になってきていま
す。

学習が発展していきますと、
人々はやがて集団から離れて自
らを高めていくという、自己教
育活動に発展していくものであ
ります。今日、それを可能にし
たのはマスメディアの普及によ
るわけでありますが、さらに、
もう一歩前進してニューメイ
アと言われるものによって、学
習がより一層高められる状況が

三 自己教育と公民館

1 個人学習との関わり

(1) 公民館とニューメディア
公民館では、「自己教育」のレ
ベルにおける関わり方として
ニューメディアでの学習を促進
するという意味で、公民館自体
がニューメディアを備えて学習
情報を提供していくというよう
になっていきます。公民館の施
設内部にコンピュータを導入
して、一階のフロアにキャブ
テンシスシステムの端末を置き、公
民館を訪れる人々が自分で自由
に操作し、情報を引き出すとい
うシステムです。これは、まだ
新潟県内の公民館では少ないと
思いますが、郵便局などではす
でに整えられており、サービ
スをしています。公民館でも徐々
にそうなりつつあります。今か
ら数年前のことですが、静岡市
へ出張しました折りに、静岡市
の中央公民館にキャブテンシ
スシステムの端末が置かれてありま

て、いろいろな情報が引き出せ
る仕組みになっていました。
もっとも、これはまだ、NTT
さんと提携して試験的にやって
いるもので料金は無料だと勿こ
とでした。本格的にそのシステ
ムに加入して情報を引き出すこ
とになれば、一回いくらという
料金が必要になるわけで、その
辺に難しさがありますが、今後
は普及するものと思われま
す。そうすると、このニューメイ
アによるところの学習情報の提
供ということが、ますます個人
学習を促進していきま
す。したがって「自己教育」というレベ
ルでのこういう事業はますます
今後の公民館に期待されるも
のであろうと思えます。

(2) 専門的学習と公民館

もう一つは、「自己教育」を進
めていきますと、今後はかなり
専門的な学習が展開されること
にもなります。あることがらに
ついて、例えば、「言葉」一つを
取り上げてみましても、その言
葉が、学会の学術用語としてど
のように用いられているか、と
か、その言葉が語源的にはどの
ような意味を持つとかか疑問が
出たときです。すると、公民館
の図書室に用意した図書では間
に合わなくなりま
す。そして、
図書館とか博物館にいかねばな
らないといったことになり、そ
こに専門機関につなげていく仕
事が必要になってきます。これ
は、一言でいえば学習相談とい
う活動領域(事業)が個人学習
と関わって格段に大きく膨れて
いくであろうと想像でき
ます。そして、この学習
相談の本身としまして
は、専門機関と結び付け
るために、専門機関の紹
介、それも、単に紹介す
るだけでなく、斡旋する
ということが、自己教育
と関わって公民館の事業
として出てくるのではな
いかと考えられます。

〈表2〉生涯学習の発展段階と学習分野の相関図(再掲)

自己教育	自己実現の場			学習情報の提供・ 学習相談の場	
	相互学習	学習者自ら企画実施	自ら企画する 自実施する 自企画する 自実施する	上の活動 の援助	通信教育 の集合学習
学習活動への参加	学習意欲の喚起	初歩的な学習	同グループの紹介	図書・資料の展示	広報紙発行
生涯学習の発展段階	生涯学習の発展段階	生涯学習の発展段階	生涯学習の発展段階	個人としての施設利用	学習情報の提供
		集合学習			個人学習

は、一言でいえば学習相談とい
う活動領域(事業)が個人学習
と関わって格段に大きく膨れて
いくであろうと想像でき
ます。そして、この学習
相談の本身としまして
は、専門機関と結び付け
るために、専門機関の紹
介、それも、単に紹介す
るだけでなく、斡旋する
ということが、自己教育
と関わって公民館の事業
として出てくるのではな
いかと考えられます。

2 集合学習との関わり
続いて「集合学習」の分野に
おいて、公民館が、自己教育と
どう関わっていくかということ
です。「諸集会」とか「学級・講
座」とか「団体育成」という形

る知識・技術が格段に要求さ
れ、学習相談に関する知識・技
術もまた要求されてくるだろう
ということでありま
す。ですから、これからの公民館職員の研究には、「ニューメディアによる
学習情報の提供について」とか、
更には「学習相談について」な
どが取り上げられる必要があろ
うと思えます。従来のレベルで
すと相互学習のレベルまででし
たので、例えば、「諸集会をどう
企画実施するか」「学習プログラ
ムの企画立案はどうしたらよい
か」「団体育成はどうしたらよい
か」という研修は盛んにやって
来たわけでありま
す。また、個人
学習に関する部分でも、「図書
資料の展示の仕方」とか、「広報
紙発行の仕方」などに関しての
研修は随分取り上げられて来た
わけでありま
す。しかし、これ
からは、こういうニューメイ
アによる学習情報の提供の仕方
とか、学習相談についての研修
をしていかなければならないの
ではないかということが考えら
れるのであります。

公民館職員に

横浜国立大学教授

この講演は、平成2年3月9日「県公
連絡協議会事務局長会議」において講演
であった吉川先生の最後の講演である
内容の不備、誤植等の責任は編集部にあ

記念 講演

で自己教育に関わっていくとい
う形態のものはあまり考えられ
ないのではないかと思います。
考える観点を少し変えてみま
す。一体自己教育が深まって
いくとどういうような状態におか
れるかを考えてみます。人間は
様々な欲求を持っています。そ
の欲求の最終的な段階は自己実
現にあると言われています。

- 人間の欲求は、
- ①生理的欲求→生命の維持
 - ②安全のための欲求→
 - ③集団所属の欲求→集団の
中での適応、
 - ④自尊心の欲求→他人に認

められる欲求

⑤自己実現の欲求→自己の
持つ能力を最大限に発揮
することに喜びを感じる
という段階に達する
(マズロー 米心理学者)

ですから、自己教育が深まっ
ていきますと、人間というもの
は、これまでの学習で身につけ
てきた知識・技術を外に吐き出
す(発揮する)欲求が出てくる
ものであります。

そこで、公民館では、そうい
う人たちの持っている知識・技
術を發揮させる場を提供する
ということが大切になります。つ
まり、自己実現の場の提供であ
ります。これを別の言葉で「人
材活用」と言います。地域にあ
る優れた人々たちを、公民館の諸
集会や学級・講座、あるいは、
団体育成等で、「人材活用する」
という言葉方をします。繰り返
しますと、公民館がその人々
のために何かの教育をするとい
うのではなく、公民館の集合学
習の場にその人々たちを活用す
ることが自己実現の場を提供す
るということであり、そうし
ますと、公民館の職員に求めら
れることは、そのような自己実
現の場の提供の仕方ということ
になります。

たちを別の言葉で「ポランテ
ア」とも呼んでいます。そのポ
ランテアのことを、教育の世
界のポランテアなので最近
は「学習ポランテア」というよ
うに言います。

これからの社会教育の場では
この、学習ポランテアを大い
に活用していかなければならぬ
と思うのであります。また、更
に学習ポランテアのことを最近
は、「生涯学習推進員」という場
合もあります。この生涯学習推
進員という言葉は、ご承知のこ
とと思いますが、前秋田県知事
小畑勇二郎氏(故人)が先頭に
立って生涯学習体制を作ったわ
けですが、秋田県の各市町村に
「生涯教育(学習)推進員」を
置いて成果をあげたものです。

これも学習ポランテアであり
ます。新潟県の社会教育委員
会では、この学習ポランテア
のシステムをどうやって県内に
進めていくかについて、この二
年間研究をすすめてきました。

近々そのレポートが出されるこ
とになっていきます。その中では、
「学習ポランテア」と使い、
生涯学習推進員を表現していま
す。これこそ、自己教育のレベ
ルにあつて、それまで身につけ
てきた知識・技術などの能力を
社会教育の場で多くの人々に提
供していくというものです。こ

の方策を今後考えていくなら
ば、生涯学習は一段と進むので
はないかと思えます。

そうなりますと、公民館の職
員に期待する二番目のことは、
「学習ポランテアの発掘活
用」ということでもあります。公
民館職員の各自の地域エリアに
生涯学習推進員になれる人々
が、学習ポランテアとして活
躍が期待できる人々たちにどん
な人がいるか、また、その人々
をどう活用していったらよい
か、といった活用方策の研究が
公民館職員に強く求められま
す。その方策の中には、そのエ
リアの中にどういったポランテ
アがいるのか、調査による発掘
や養成の必要もありません。
し、研修も必要になりましょ
う。

専門家だからといって、必ず
しも教える技法を身につけてい
るとは限りません。だから、活
躍してもらうためには、指導助
言の方法を学んでもらう必要も
あります。そういうようなポラ
ンテアの活用方法の研究が公
民館職員に求められていくので
はないかと思えます。今後生涯
学習が進むにしろ、自己教育
の段階の人々がどんどん増え
ていくでしょう。その人々たち
が、公民館がどう関わっていくか
というところが、公民館の事業と
して考えられなくてははいけな

し、その事業としては、まず、
個人学習のレベルとして、
ニューメディア等による学習情
報の提供や学習相談が必要
になってくるでしょう。した
がって、公民館職員に期待する
ものは、このような、ニューメ
ディアによる学習情報の提供の
仕方、学習相談の仕方への知見
が要求されるであろうと思いま
す。集合学習の場に関する
ならば、自己教育の段階にある
人々を、人材として、学習ポラ
ンテアとして、さらには、生
涯学習推進員として、いかにし
て活用するかという活用方策の
研究が進められねばなりません。

おわりに

全国公民館連合会の専門委員
会では、これまでの「集い・学
び・結ぶ」の上に「知る・参加
する」を加えるようになりまし
たが、この付け加えられた「知
る・参加する」は、まさに、こ
こで言う「学習情報の提供」で
あり「自己実現の場」に他なら
ないものでしょう。それは、と
りも直さず、公民館においては
生涯学習の発展段階における自
己教育の段階を考える必要が生
じたからだというように思うの
であります。公民館職員の皆さ
んに大きな期待をよせていま

村上市中央公民館

活性化した長寿大学

特色を生かしたイベント

はじめに

本県の最北の都市村上市は、城下町として栄え、海・山・川それぞれに美しく、伝統文化を守りながら豊かに開けてきたまちである。

わが公民館でも、これらの伝統産業や文化を公民館事業として取り組むべくいろいろと考えてきた。考えてきたのはわたしだけではなく、今から十年ほど前のスタッフだった。

「村上」と言えば、

堆土産業のまちとか、三面川の鮭、北限の茶どころとして全国的にも有名である。

このような伝統産業・文化の保存継承並びに、創造活動は公民館の事業として極めて大切な

ことである。それが公民館でも、これらの伝統産業や文化を公民館事業として取り組むべくいろいろと考えてきた。考えてきたのはわたしだけではなく、今から十年ほど前のスタッフだった。

長寿大学講座

当公民館の長寿大学講座は、市内在住者で六十歳以上の者が入学できる。ちなみに、今年度の受講生は百七十名。うち六十%強が女性である。毎月一、二回開かれ、一般教養講座の他に趣味の講座として、書道・俳句・短歌・川柳・盆栽・ゲートボールがあり、各グループで自主的に活動している。

「楽しく学べる講座・生きがいのある人生を送るための一助となる講座」をモットーに多様な活動を実施している。(年間学習計画表参照)

鮭の塩引き実習について

この学習活動も近年マンネリズムを感じていた矢先、市農林水産課のイベント「鮭の塩引き



くれるもので、村上市内ばかりでなく、他市町村、県外からも参加申し込みが殺到しているもの。この「塩引き道場」と「郷土学習講座」とをドッキングさせることにしたものである。

当日の実習は、参加者四十人(道場の広さの関係上定員を絞ったもの)で、高齢者と言えないような真剣さと熱心さで、そのうえとても楽しそうに学習していた。受講生の殆んどは初挑戦であっただけに極めて高い成果を得て、満足感で一杯の様子であった。

おわりに

実習を終わり、受講生に感想を求めたところ「家へ帰ってからもう一本やってみる」とか「近所の人やせがれ夫婦にも教えてやらねば...」といった声が残った。この充実感あふれた学習であったことが私自身にも事業の成功感を味わわせてくれたものでとてもうれしかった。

これからも、単に塩引きだけでなく、郷土に伝わる大切なものを、年輩の人たちから次代を担う若者に伝え、一人でも多くの人に郷土村上に対する愛着を深めてもらいたいと願っている。

(村上市中央公民館社教主事 大滝慈光記)

平成2年度村上市地区長寿大学講座事業計画

No.	月	講座名	内容
1	5	開級式 ウォークラリー	・1年間の活動計画 ・講義と映写「交通事故防止」 ・第7回全国ウォークラリー大会参加について
2	3	研修旅行	・三川村平等寺～阿賀川ライン下り～石油の世界館
3	7	交流会	・婦人会民踊クラブとの交歓
4	8	宗教講座	・お盆前の宗教講話
5	9	ふるさとづくり講座	・「ふるさとの川モデル事業」について、話を聞く
6	10	折紙教室	・日本の伝統的仕事「折紙」を学び、創る喜びを味わう
7	11	鮭引き実習	・郷土の伝統技術を身につける
8	12	ふるさと歴史講座	・「お城山と周辺区域遺構について」現地見学と講義
9	1	教養講座	・村上市出身者から、村上と村上人についての講義
10	2	施政講話	・市長から村上市の重点施策について聞く
11	3	閉級式	・皆勤賞、奨励賞表彰

サークル交流

夢をコッコツと彫る：

青海町木彫教室

私たちの木彫教室は、町の社会教育講座の一環として誕生、以来今年で十二年目を迎え、今では自主グループとして運営されています。講師には、彫刻家の藤巻邦彦先生をお願いし、月に二回、町民会館を会場にご指導を頂いております。



会員は、毎年町の広報紙で募集、現在は二十三名です。グループの歴史もあって、会員のキャリアにより作品も大きささまざま

ですが、年に一作品だけは同じ素材のものに取り組み、新しい人からも参加しやすいように工夫しています。また、先輩が後輩のめんどうをよく見て和気あいあい。若い人から実年まで、楽しく、笑い声の絶えない教室でもあります。

年一回、野外研修として、町外へ出かけ、技術を吸収しており、今年度は上越市で開かれた県展作品を見学しました。

これからの地道な生涯学習として「コッコツ」と夢の彫刻に精進したいと頑張っています。

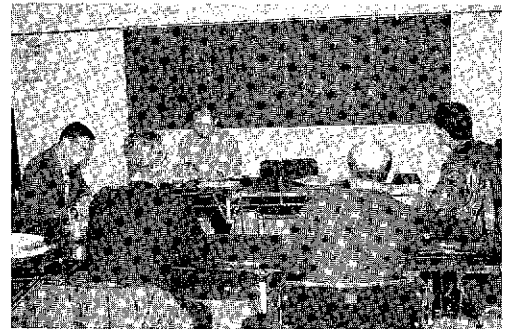
(佐藤正己記)

川柳と生涯学習

加茂川柳会

十七文字にかけける生涯学習といたら大げさだろうか。公民館は今、市民の参加をより活発にした生涯学習をどう進めるかについて苦慮している。

会員7名で産声をあげた当会も、同じような問題に直面した。発足後しばらくは会員も増え続けたが、次第に減少し会の存続さえ危うくなってしまった。そこで、苦肉の策として会費を増



額して会報の充実を図りPRに努める傍ら、市の広報紙で呼びかけ、発足当時はのぐ会員をかかえるようになった。勉強会は、各自が作品を持ち寄り、会員同志で数点を選び出し、選句の動機や没句上の問題点について意見を述べ合う形で真剣に議論し成果をあげている。

生涯学習の一環として、たくましい川柳の会に育っていくことをひたすら願っている。

今月の題「ヘルメット」

ヘルメット かぶれば青春したくなる マサ子

(清水 弘記)

投稿大歓迎

気軽に投稿ください。字数は四百字。スナップ写真を添えて。薄謝を呈します。

黒川村公民館主事補

加藤 明美さん (23歳)

電話が鳴ると「公民館の加藤です」と明るく応対する彼女。

平成元年、二年と連続町村職員バレーボール県大会女子の部で優勝。常にチームの要で牽引力となった彼女は、小学校六年の時、将来の夢が「全日本バレーボールチームの選手になりたい」であったそうで、村上女子



高卒業と同時にエヌ、イ、シー入社、社会人バレーボー

ル選手として活躍。子供の頃の夢がそのまま実現しているところに彼女の根性がうかがわれる。家庭の事情によりUターン。平成元年四月役場へ就職。社会教育、体育を兼務、公民館事業と図書館も担当、万能型で皆さんに頼られている存在。又、ワープロによる事業処理も彼女の腕にかかっている。

「今、彼は？」

「バレーボール」とトンボメガネの奥から笑顔で答える彼女がまぶしかった。

(黒川村公民館社主事 中村 昇三記)

素顔拝見

上越市立公民館主事

小嶋 淳一氏 (30歳)

身長一七四センチのすっきりした顔にめがねのよく似合う好青年。昭和56年に市役所庶務課をふり出しの行政マン。公民館に来て三年目の成人教育係、今年担当した「自然を知る学級」は人気の的。で受講者からの年賀状が増えたとか。



地域住民にうけがよい。仕事から酒を飲む機会が多くアルコールにも強い。自慢のノドを披露しここでも実力を発揮し飲みミニケーションを大切にしている。

家族は両親と良妻それに二歳の長女。家庭サービスも手なれたもの。これからは持まえのアイデアを生かし生涯学習推進の立役者として一層の活躍を期待している。

(上越市立 公民館係長 山川 剛記)

情報紙

めーる・へん 創刊準備号

Y Y C (大和町公民館内) 発行



大和町公民館を拠点として活動を始めたY Y C (やまと・やんぐ・さーくるの略称) から、近く創刊するための準備号「めーる・へん」と名づけられた情報紙が贈られてきた。

このY Y Cというサークルは、大和町ふるさと創生事業の一環として、ふるさと基金から、青年活動助成費(100万円)を受けて今年度(5月12日)に発足したばかりの若者たちのための

活動団体である。

『若者活動は、若者の手で』という村民の願いを受けて、主な活動を

○若者を対象にしたイベントの企画・運営

○町内外の青年サークルとの交流を通して仲間づくり

○若者向けコミュニケーション紙の発行

として、現在の会員数は14名だが、これからは、より多く

新潟県国際交流協会

シンボルマーク募集

「新潟県国際交流協会」は平成二年十月一日に設立したばかりの団体。

新潟県・全市町村ならびに民間企業団体などの出資によって設立されたもので、その趣旨は

「世界に開かれた新潟県づくり」を目標に「新潟発」友好の輪「世界の友へ国々へ」を合言葉に、県民挙げて国際交流に取り組んでいくとしている。

公民館も積極的に関わりを深める必要のある団体である。ふ

るってシンボルマークの募集に

の若者が気軽に参加するサークルを目指しているという。

ここに紹介した情報紙めーるへんは、創刊準備号として発行したもので、B5判8頁からなっている。編集者は、大和町の若者たちによる手作りのコミュニケーション紙。フリー

トーク、言いたい放題、何でもありの編集にし、若者たちの現在の姿を載せていけるようにしていきたいとしている。

Y Y Cサークルの一層の成長発展とともに、めーる・へんの充実についても温かい目で見守りたいものである。

応募してはいかが。

◎募集内容 躍進的な新潟県の国際交流を特徴づけたイメージを図案化したもので、未発表のもの

◎応募締切 平成三年三月一日(日)

◎用紙の寸法等 B5判、説明添付

◎入賞点数 入選一点五万円 佳作三点各一万円

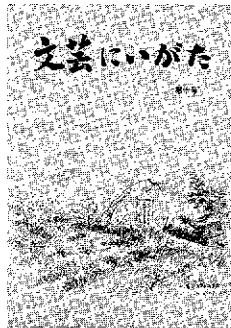
◎送付先 新潟市新光町一六四 (財)新潟県国際交流協会

(電話)〇二五二八五(六〇二) 多数のご応募をお待ちしています。と。

資料紹介

文芸にいがた

新潟市中央公民館



新潟市中央公民館から「文芸にいがた」のご惠贈を受けた。A5判320頁にわたるもので、内容も充実した質的に重量感のある作品によって網羅した冊子である。

この種の文芸誌は教育委員会が編集発行することになっているが実際の事務は公民館で行っているものが多い。新潟市でもご他聞に洩れず、主管は公民館のようである。そのことは、内容を一読するとよく分かる。とりわけ、受賞者の「受賞のことば」の中に、公民館とのかかわりの中から作品ができていくことが、書かれている。まさに、公民館あっての「文芸にいがた」であることに敬意を表するものである。

蛇足ながら付け加えたいことは、こうした冊子が、講読者の個人の活用に止まらず、学級・講座における学習テキストとして一篇でも2篇でも取り上げるような活用がなされたら、公民館で編集している価値がより一層高められるものと思うのである。

あとがき

◆地域づくりは、足元の地域から世界に視野を広げ、そして、世界的視野で自分の住むまちを眺める視点が求められていきます。

◆国際的には、長期化しそうな湾岸戦争の雲行き。今こそ、相互の理解と協力が必要な時。

◆そこにつながる足元の地域でも、住民相互の理解が、地域づくりの第一歩です。

(上村記)

発行所 新潟県公民館連合会

【新潟市川端町2-9・県林業会館内】

【電話・新潟(025)224-6073】

発行人 会長 木下清一

編集人 事務局 上村捨二郎

【定価1部120円 年共1,440円】